

## ■□ 全体セッション

【北川】申し訳ありません。時間の関係で途中だったところもあると思いますけども、一応、打ち切らせていただきました。そこで、あらためて全体が集まったところで、最後に登壇者の方に今のグループセッションの内容を聞かれての感想なり、あるいはご発表の中で、これは言い足りなかったとか、これだけは言っておきたいということを、お一人、1分から2分ぐらいで発言していただいて、この会をとりあえず区切りたいと思っております。

まず現地報告の方々からお願いをして、最後に濱田先生からお願いしたいと思います。

【大越氏】皆さんからいろいろなお話を伺いましたけれども、一番のキーワードとして実感したのが、やはり、つながりという言葉ですね。震災以前からのつながりをきっかけに、復興の支援をいただいている方、あるいは、それまではつながりなかったですけれども、震災をきっかけに、復興をきっかけに、宮城だったり福島であったり、岩手の各地との思い出、あるいはそういうのがあって、現在、さまざまなつながりが持たれているということを、あらためて、それぞれの方々の体験談や思いを聞かせていただきまして実感いたしました。そういう意味で、やはり協同組合、協同の原点でもある、つながり、きずなを引き続き重視して取り組んでまいりたいと思いました。どうもありがとうございました。

【北川】ありがとうございました。それでは気仙沼信用金庫の井出さん、お願いします。

【井出氏】皆さんからのお話を聞いて、震

災4日目から現金を配ったっていう話で、初めてそういうことを知った、本人のことを職員が顔は知っているか、ということがありました。実は私たちからすると、信用金庫ってFace To Faceが統一ロゴというか、統一的な観念というか、顔と顔を常に知っているということが信用金庫のウリになっています。そういう意味では、普通にそういうことを日ごろから行っていますので、やっぱりそれが震災のときに生きる、日頃からの活動が、いざっていうときに強みになる。今までやってきたことが間違いではないなと、あらためて、皆さんの感想を聞きながら認識したところです。『おかえりモネ』、先ほども話しましたが、ぜひ見ていただければと思います。よろしくお願いします。

【北川】モネともどもよろしくお願いいたします。それでは、ふくしま未来農協の加藤さん、お願いします。

【加藤氏】本日は、お話しする機会を与えていただきまして、ありがとうございます。10年という区切りですけれども、本当にまだまだ自宅に戻ってない方も多くおられます。やはりみんなで手を取り合うとか、そういう活動がまだまだ必要だなと再認識しております。あと、今後、大震災のみならず、やはり温暖化の影響で本当に毎年のように自然災害が多くて、われわれも苦慮しているところですが、ちょっと離れていてもいろいろと支援できることはあるので、われわれも震災以降、九州のエフコープさんだったり大分のコープさんだったり、JA同士でも秋田だったり、そういうつながりを深めていくことはもっともっと

できると思っています。Face To Face で足を運んでいただきながら、つながりを深めていけばありがたいと思っていますので、今後ともよろしくお願いします。

【北川】 はい、ありがとうございます。それでは浜通り医療生協の工藤さん、お願いいたします。

【工藤氏】 今日はどうもありがとうございました。私が今一番強く感じているのは、世代的継承の必要性です。今年の新入職員にも今日のような話をしたのですが、新入職員の皆さん、当時たとえば中学生でしたとか、よく覚えてないという人が、やっぱり多いですね。うちの職員 200 人いますけれども、そのなかで見ても半分ぐらいは、もう既に震災のときにいなかった職員ですね。ですから、こういうことを伝えるっていうことを常に意識しないと、あつという間に記憶っていうのは失われていってしまうのだらうなと思いますね。私、今 40 歳ですけども、これまでこうした運動を担ってきた人たち、私より上の世代の方々は、原発が廃炉になる、あと 30 年後、40 年後にその姿を見届けることができない方たちですね。私がおそらくギリギリの世代だろうと思っていますので、そういう意味では、それを伝えなければいけないという思いを強くしております。ぜひ、この福島記憶を、皆さんも引き継いでいただければと思っています。今日はありがとうございました。

【北川】 はい、どうも、ありがとうございます。それでは宮城教育大学生協の田中さん、お願いいたします。

【田中氏】 本日はありがとうございました。私はブレイクアウトのなかでも自ら触れさせていただきましたが、協同組合は、本当に多種あります。実は、学生たちもセミナーという場で自らの生活協同組合について学

ぶことは行うのですが、そこだけではなくて、そもそも協同組合について学ぶということも行ったりしています。ですので、この間、私がいろいろ触れてきた学生たち、大学生協に就職してくれた人もいますが、この間、購買生協にも多くの学生を送り出していますし、医療生協にも 2 人学生を送り出しました。また、こういった活動に、今日報告の中で触れたように、ツイッターで学内の安否情報集めたりとか、被災者に電話を掛けた当時の若手職員が、今、大学生協の幹部になって福島大学生協で役員をしたりとか、東北で事務局長をしたりとか、育ってくれています。また、当時学生で、被災地訪問をしてくれた学生で、今、東北大生協で店長になっている学生もいます。そういうふうに、次世代を担うかたちで関わってくることがうれしく思います。今後も、協同組合の人材育成っていうのでしょうか、そういった役割は、大学生協にとって結構大きいのかなと思っています。

あと、協同組合に人を送り出すだけではなくて、今の私は宮城教育大学で仕事しておりますので、教員になる学生が多いです。また、福島大にいたときには公務員になる学生が大変多かったです。そういった学生の皆さんに、生活協同組合の活動、特に社会的課題の環境とかユニセフとか平和とか、そういう課題、活動に在学中に触れていただくことで、より社会に関心を持つ人を一人でも多く輩出していく、そういったことが今後も大事になると認識しております。私からは以上です。本日はありがとうございます。

【北川】 どうもありがとうございました。それでは、おおさかパルコープの林さん、お願いします。

【林氏】 グループの議論も見させていただ

きましたが、やはり皆さん言っておられた日ごろのつながりや地域のネットワークが、キーワードになったと思います。災害はこれからも、津波のかたちもあれば阪神淡路のような直下型もありますが、大規模災害の場合は必ず後方支援という拠点が必要になってきます。遠野で学ばせてもらった“日頃からの地域のつながり”が本当に大事だなと思います。例えば2011年の5月3日には、確か620人のボランティアの方々が遠野に集まり、被災地に向うバスが20台必要だということで、まずJAさんをお願いをして、JAさんがいろいろなところ、葬儀屋さんに連絡したり民間の観光業者とか、あと建設会社だとかから、バス20台を手配していただいたとお聞きしました。そういう意味では、やっぱり地域の日頃のネットワークがすごく大事だなと思いました。

あと、おおさかパルコープに引き寄せれば、職員はなかなか地域に根ざせていないのが現状ですが、地域で活動されている組合員さんは町内会をはじめ行政や社協さんとなつながっています。事業と経営に必死になっている職員と地域につながっておられる組合員さんの活動が、どうやったら結びつくのが重要になります。これは私の感想というか反省ですので、乱暴な言い方かもしれませんが、そこはすごく、大事なだなあと思いました。以上です。ありがとうございました。

**【北川】** ありがとうございます。それでは最後に北海学園大学の濱田先生のほうからお願いいたします。

**【濱田氏】** 私は、Aグループに参加させていただきました。おっしゃっていたのは、やっぱりこういった機会が東日本大震災の現状がよく分かった、分かったっていうのは、おそらく今まで報道等でしか聞いてな

かった部分だと思いますので、現地の報告者の方々からの内容を聞いて、こういう状況だったんだと気付かれたということでした。ALPS処理水とか関心の高いものだけではなくて、皆さんの現地の報告の活動のなかで、協同組合がどういうふうに動いていたかが分かったということです。

それを受けて、私の感想ですけども、協同組合というひとつの枠組みが、被災地、県域を越えて被災地、さらに県域を超えるだけでなく業種業態、分野を超えた取り組み自体が協同組合間協同だと。今日も、皆さんが本来学べないことが学べる、これこそ協同という言葉でくくられた、非常に大事な財産になっているのではないかと思います。私は漁協の話をしたのですが、やはり漁業者の場合は、海をみんなで共有して、誰の財産でもない、みんなのものだから勝手なことするなっていうルールを作ってみんなで使う、だから好き嫌い関係なく、非常に議論をしなくちゃいけない世界である。こういうギルド的な世界だからこそ、ある意味、仲がiiiってわけじゃなくて、みんなが生きていくために自然を使っている、そういう中でコミュニティが否応なく成立しているわけであって、これがまた復興にとって機能する部分もあったわけです。

これは漁業の世界ですけども、協同組合では、みんなで共有すべき何かがあるわけで、そこで、つながりを強いものにする。そのためには、やはり顔を合わせてコミュニケーションを積み重ねていくことだと思います。つまり、協同っていう言葉は、それぞれの分野で、それぞれ大事にしているものを共有し、つながり、分野を超えて、県域を越えていくこと。今日のこういう機会も含めて、非常に協同を大事にしなくちゃいけないねということを感じました。

以上です。

**【北川】** はい、どうもありがとうございます。今回の2年ぶりの総会シンポジウム、このご時世ですからコロナの問題を取り上げるという考え方もあったわけですが、ここはやはり、東日本大震災10年というところに焦点を当て、さらに生協だけではなくて、さまざまな協同組合の現地での活動から、もう一度私たちが学ぶという考え方で企画をいたしました。言うまでもなく、協同組合というのは事業を通じて組合員にお役立ちをするというのが、ひとつの使命ですけれども、それともうひとつ、今、皆さんがおっしゃったように、持続可能な地域社会づくりに積極的に関与していくことも重要な使命としてあると思います。そのためには、さまざまな協同組合協間協同も含めて、あるいはその協同組合だけではなくて、言い方が正しいかどうか分かりませんが、良心的な企業ともしっかり手を結びながら、社会をつくっていくことが重要ではないか。さらには国とか自治体、そういう、いわばさまざまな団体、ステークホルダーと連携をしていくことの重要性を強く感じました。

現地からの皆さんがおっしゃったことは、まだまだ復興が道半ばであるということでした。西にいと、そもそもマスコミで取り上げられる回数が少ないし、忘れられがちになるのですが、私たちとしても、ぜひこの問題を自分たちの問題として受け止めて、これからの協同、協同組合のあり方を考えていかななくてはならないと強く思いました。これで総会シンポジウムを終了します。貴重なご報告をいただいた皆さま、熱心にディスカッションに参加いただいた皆さま、どうもありがとうございました。